

おとり採集のこと —ある日の採集日記から—

木下 賢 司

8月も半ばになると、豊岡市妙樂寺付近のクサギの木は、薄いピンク色の花を咲かせて満開となる。そこは、夏型の大型アゲハチョウたちのパラダイスである。いふも思ふことなのだが、どラれてあまり美しくもなく、そのうえにどちらかといえば、嫌な臭いのあるクサギの花が、チョウたちにあれほど人気があるのだろうか。もっとも、蓼食ラ虫も好き好きで、あの臭いドクダミの花にさえ集まる虫もあるのだから、クサギの花を慕ラチョウかいても、別に不思議はないのかも知れないのだけれど……。きっと虫たちは人間と違う基準で、美しいものや良い香りを判断しているのだろう。

ともあれ、クロアゲハ、モンキアゲハ、カラスアゲハ、オナガアゲハ等の、アゲハ界の大物たちが十数匹も入り混じり、あるものは蜜を吸い、あるものは仲間を追って戯れているさまは、まさに壮観である。

そんな様子を見ていると、いづか話に聞いた「おとり」を用いてやる採集のことを思いだし、良い機会なので実験をしてみることにした。用意したものは、クロアゲハ(♂)とオナガアゲハ(♂)の標本および黒、赤、青、黄、白の布で、布はそれぞれ、チョウのかたち、円形、三角形、四角形に切り抜いたものを用いた。実験は、1970年8月18日に、豊岡市妙樂寺でおこなった。

標本の「おとり」を見せる

実験の結果は大成功。クサギの木の幹より約5メートル離れ、実際にチョウたちの舞っているところからは約10メートルの地面に置いたクロアゲハの標本めがけて、いずれの種も盛んに、ほとんどクロアゲハにすれすれのところまで降りてきた。これなら、苦勞なしにいくつでも採集できそうに思えた。

「おとり」をオナガアゲハの標本に替えてみても、結果は同じであった。

カラスアゲハなどは、ずいぶんクロアゲハやオナガアゲハとは翅

の色が違ふように思われ、ましてあの白い大きな紋のあるモンキアゲハまでが同じように降りてくることには驚いた。

虫の白帯を見せる

次に、チョウたちからよく見えるように、クロアゲハやオナガアゲハの虫の特徴である、後翅表面の白い部分を出して置いてみた。おそらく、降りてくるチョウのほとんどは虫であり、彼らが「おとり」を早であると思って降りてくるのだとしたら、「おとり」の虫の白い部分を早く発見できれば、彼らは降りてこないかもしれないと思ったからである。

結果は、前回と同じで、どの種にあっても、ほとんどすれすれのところまで降りてくることに変わりはない。真黒なクロアゲハやオナガアゲハに、モンキアゲハまで近づいてくる様子を見ると、本当に、あのわずかに見える白い紋を見て、彼らは虫早に判断できるのだろうかと思ひに思ひてきた。

布の「おとり」を見せる

次に、チョウのかたち、円形、三角形、四角形に切り抜いた黒い布を前の実験と同じ場所に置いてみた。

結果は、かたちには全く関係なく、標本を用いたときと同じであった。さらに驚いたことには、三角紙ケースなどを入水してきた、かなり大きな黒の袋（20センチ四方）にさえ、どの種のチョウも強い反応を示した。

続いて、赤、青、黄、白の布で作った切り抜きを用いて同じ実験をしてみたが、これに対してはチョウたちはなんの反応も示さなかった。

以上の結果をみる限り、これらの黒いアゲハチョウたちは、ある程度の色を見分けることはできても、そのかたちを見分ける能力に至っては、全くお粗末であるように思われた。

このようなことが、果たして他のチョウにもいえるのか、機会があればこれから試してみたい。もしそんなことがどんな種のチョウにもいえるなら、いろいろな色の色紙さえあれば、寝ころがっていても採集ができるかもしれないなどと、行き交うアゲハたちをぼんやり眺めながら、あれこれ夢のようなことを考えている私だった。